

『恋知らずのラブンツェル』

著：松幸かほ

ill：蓮川 愛

週末、退社した眞幸は小走りに成彰との待ち合わせ場所に向かった。

残業になることを見越して待ち合わせ時間を決めたのに、思ったより残業が長引いてしまって遅刻しそうなのだ。

なんとか間に合うようにと急いで、待ち合わせ場所に行くと、すでにそこには見慣れたBMWが停まっていた。

そして眞幸が近づくと助手席側の窓が開いた。

「お疲れさま」

運転席に座した男が、外に見える眞幸に笑顔で声をかけた。

無造作に伸びた長めの前髪から見える綺麗な形の整った眉に、真っすぐな鼻梁。男らしく整った顔立ちは人目を引くことこの上ない。

若き経営者としてビジネス誌に取り上げられると、普段はビジネス誌など見向きもしない女性たちが多く手に取り、その号のみ完売した——という逸話を持つのが、牧野成彰という男だ。

「乗って」

促す声に、失礼します、と言ってから眞幸は助手席に乗り込む。

眞幸がシートベルトを締めるのを待って、車は動きだした。スムーズに車列に入り、走りだしてから、

「遅れてしまって、すみませんでした」

眞幸は待ち合わせに遅れたことを謝る。

「いや、時間丁度だ。俺が少し早く着いただけだから気にしなくていい。……相変わらず忙しそうだな」

成彰は運転しながら返してくる。

「そうですね、相変わらずバタバタしてます」

輸出入に携わる仕事であるため、海外とのやり取りも多く、現地の時間との兼ね合いなどから連絡を取るのが時間外になることも多い。

基本的に英語でのやり取りになるのだが、会社には眞幸以外に交渉などができるレベルで英語が話せる者があと一人しかいない。

以前はもう一人いたのだが、結婚して相手の暮らす地方で生活をするために退職したのだ。

三人態勢だった時でも決して余裕のある仕事ではなかったもので、今は二人共に負担が増えている。

とはいえ、家族持ちのもう一人の社員にこれ以上の負担はかけられず、結果、眞幸の負担がど

んどんと増えているのだが、一人暮らしで比較的自由になる時間が多い自分が引き受けるのは当然だろう。

「先輩こそ、忙しいんでしょう？」

当然だとは思っていても、口にすれば愚痴になるかもしれない。

眞幸はそっと話題を成彰の方へと振った。

「その日によって違うが、毎日、面倒な仕事をどうやって向こうに押しつけるか、川崎との攻防が一番神経をすり減らしてる気はするな」

成彰はそう言って笑う。

彼は大学生の時に高校時代からの同級生数人と会社を立ち上げていた。川崎というのもその中の一人で、社長の立場についている男だ。

もっとも役職は会社を立ち上げた時に全員分の肩書きを籤引きで決めたらしく、成彰は副社長という肩書きを引き、そのままになっているのだと以前笑って教えてくれた。

つまり、創業メンバーの肩書きは一応それぞれ違うが、力関係は横並びということなのだろう。

彼らが起こした「SG28」という会社は、高校時代に彼らが仲間内で作って使っていたアプリケーションソフトを無料開放したことから始まったようだ。ユーザーからの意見を吸い上げて改良版を出し、有料版や新たなアプリケーションを販売したところ、大当たりし、そこから徐々に事業を展開した。

成彰が言うには、『それぞれの興味のある分野がバラバラで、その分野でのニッチな企画をしたら当たった』らしい。

当時はまだ大学生で起業というのは珍しく、それで世間から注目されたことも追い風になったが、全員、学生という肩書きの恩恵がある間だけ、と思っていた。

しかし、思った以上に規模が大きくなり、途中でやめられなくなって今に至っている、というのが以前、眞幸が聞いた会社の説明だ。

だが、そこまで規模を大きくできたこと自体が、成彰を始めとして、非凡な才能を持つ人たちが集まっているからだろうと眞幸は思う。

「どうした？ 俺の顔に何かついてるか？」

車が信号待ちで停まった時、不意に成彰が聞いた。

「え？」

「俺の顔に見惚れてくれてるのかと思ったが、その反応だと違うようだな」

笑う成彰に、眞幸は苦笑する。

「すみません、ちょっとぼーっとしてました」

成彰のことを考えてはいたが、顔を見ていたというわけではないのでごまかす。

「そのぼーっとし具合からすると、かなり疲れてるようだな」

「そうですね、否定はしません」

眞幸はそう言ってから、

「だから、今日はどこに連れていってもらえるのか、楽しみにしてたんです」

と付け足す。

「責任重大だな」

眞幸の言葉に笑いながら返した成彰の車は、港の方へと向かった。

倉庫の並ぶエリアで、レストランがあるような雰囲気ではないが、少し行くと綺麗に駐車スペースの真新しいラインが引かれている箇所があった。

車はそこの一画に停まり、眞幸は降りたが、無機質な倉庫ばかりが並んでいる。

「こっちだ」

成彰は慣れた様子である倉庫へと近づいていく。

灯りも少なく、気付かなかったが、その倉庫には真新しい黒いドアがつけられていた。そして控えめに『Sadiya』と書かれた看板があった。

最初のドアを開けると三畳ほどのエントランスがあり、そこにインターカムをつけた従業員らしい男が立っていた。

「予約をした牧野といたします」

「牧野様、お二人でご予約をいただいておりますね。どうぞ」

従業員の男はそう言うともう一つのドアを開けた。その先に広がっていたのは、外の暗さとは対照的に明るい場所だった。

空模様の壁紙に紗のような薄い布、円形の石を模した柱と、まるで屋外庭園かギリシャやローマ辺りの神殿にいるような優雅できらびやかな空間だった。

「凄い……」

眞幸は思わず足を止め、店内の様子に見入った。

倉庫の利点を生かして天井は高く取られ、二階席もあるが、通常の二階よりも高い位置に設けられていた。

「眞幸、行くぞ」

案内係について数歩先にいた成彰が、眞幸が足を止めたことに気付いて振り返り声をかける。

「あ、はい」

足早に成彰に追いつき、準備されていたテーブルに着く。

そこは一階フロアの奥で、店内の様子がほどよく見える席だった。

「凄く素敵なお店ですね。倉庫の中とは思えない……」

案内係が下がるのを待ってから、眞幸は成彰に感想を告げる。それに成彰は満足そうに笑みを浮かべた。

「知人の紹介で一度来たことがあるんだ。予約客だけの営業で、その日の予約の人数によって席のレイアウトを変えるらしい。実際、この前来た時とは違ってる」

「そうなんですね。広いフロアなのに、席数が少ない気はしたんですけど……」

「数えたのか？」

「いえ、そういうわけじゃなくて……空間の使い方が贅沢だと思って」

テーブル間の距離が広く、隣の席の話し声などは微かに聞こえては来るが内容までは聞きとれなかった。

そして、かなりオープンな空間だが、装飾としてではなく間仕切りとしての役目も果たしている布のおかげで、テーブルごとの独立性が保たれていた。

「今日は、シェフのお勧めコースでオーダーを通してある。後でメニューを持ってきてくれると思うが、それを見て変更したいならそれでもかまわないそうだ」

「いえ、先輩の見立ては間違いがないので、そのまま大丈夫です」

高校生の時に知り合ってから、成彰は何かと気にかけてくれて、眞幸の好みなどについても彼はよく知っている。

初めて来る店では、成彰に任せておくのが一番だということも眞幸は経験上知っていた。

最初の頃はいろいろと遠慮もしていたが、今ではすっかり素直に甘えることに慣れてしまった気がする。

もちろん、甘えてばかりになるのも悪いので、お返しをするようにはしているが、それでも圧倒的に「してもらおう」ことの方が多い。

以前はそれが落ち着かなくて、大学生になった時に思い切って、してもらおうことが多すぎて申し訳なく思っていると伝えたのだが、成彰は、

『俺くらいの年齢になると、会って気分よく過ごせる相手っていうのもなかなか難しくてな。こっちはこっちで、俺の気分転換に付き合わせてる罪悪感も持ってるから、眞幸が嫌でなければこれからも付き合ってもらえたらありがたい。それに、可愛い後輩にいろいろとしてやれるのは大人の特権だからな』

そう言って笑った。

確かに九つも上の大人からしてみれば、眞幸などまだまだ子供だろう。

——俺が、今の先輩の年齢になった時、先輩みたいにできるのかな……。

ふっとそんなことを思うが、すぐに無理だろうなと感じた。

人としての器というか、包容力がそもそも違うような気がするのだ。

「……それで、値札をよく見もせず、じゃあ、その三点セットをっていつも使ってるカードを出したんだ。少ししたら店員が申し訳なさそうな顔で戻ってきて『申し訳ございませんが、こちらのカードの上限が』って耳打ちしてきて……その時に、一桁見間違えてることに気付いたんだ」

食事をしながら話すのは、仕事以外の話だ。もちろん、仕事がらみで知り合った人や商品などの話はするが、仕事そのものについての話はしないというのが、ルールというほどではないが、暗黙の了解的にある。

もちろん、仕事の話をもっとくしないわけではなくて、それは場所を移してからだ。

「じゃあ、七十万……。どうしたんですか、それ……」

「一桁間違えたと素直に言おうかとも思ったが、小さなプライドが邪魔をして、幸いもう一枚、普段使わないカードがあったから『引っ越しでいろいろ買い揃えたからかな』なんて言い訳めいたことを言って、そっちのカードで無事に決済をすませたんだが……無知は怖いって思い知った事件だったな」

成彰はそう言って苦笑する。

話題になっているのは、成彰がつけていたネクタイピンについてだ。

成彰はいろいろなネクタイピンを持っているが、それは初めて見るものだったので、話を振ったところ、思いがけない失敗談になったのだ。

「でも、無事に決済できてよかったです」

「ああ、でも、その後しばらくは耐乏生活で、なんだかんだいっては川崎にタカったがな。その一件以来、さりげなく値札を確認してる」

「先輩の耐乏生活って、なんか想像つかないですね」

「そうか？」

「先輩が、スーパーのおつとめ品をいろいろ買ってる姿とか、想像できないです」

笑って返す眞幸に、

「眞幸は、よくそういうものを買うのか？」

成彰は問い返してきた。

「そうですね……、その日の夕食に食べてしまうお惣菜なんかは、値段が下がっていたら、よかったですって思って買って帰ります。それ以外だと、食材なんかは翌日までに調理できるかどうか分からないのであまり買わないですけど」

普段の生活を思い返しながら眞幸は返す。

一人暮らしで、残業が多いので、スーパーに立ち寄る時間はだいたい値下げされたおつとめ品が出る時間になることが多い。

とはいえ、そういった品は、遅くとも翌日のうちに食べきってしまわないといけない気がするので、食材については翌日が休みでもない限りは買わない。

そもそも、平日のスーパーには惣菜が目当てで立ち寄っているところがあるのだ。

「眞幸の食生活について詳しく聞いたことはなかったが…心配した方がいい気がしてきたな。普段は何を食べてるんだ？」

「休みの日にまとめて炊いたご飯をあたたためて、作り置きしてあったり、下ごしらえまでしてあったりする食材を適当に味付けして、あとは買ったお惣菜を足して終わりです」

眞幸が答えると、成彰はほっとした顔をする。

「一応、自炊はするんだな」

「そうですね、かろうじて、一応は」

「学生時代から本格的に働き始めにかけての頃の俺よりはよっぽど健全で安心した」

そう言って笑う成彰に、

「逆に、先輩のその頃と今の食生活の差が気になります」

眞幸も笑いながら返す。

「その頃の話をする、どん引きされそうなんだが……」

成彰がそう言いながらも話をしようとした時、携帯電話が鳴った。

成彰は二人で会っている時には、メールやアプリケーションの着信は基本的にスルーする。だが、今は通話の方だ。

成彰はちらりと画面を見ると、

「すまない、ちょっと失礼する」

携帯電話と手に取ると、席を立ち、離れた。

会社の取締役などという立場柄、たとえ後輩といっても社外の人間に聞かせられない話もあるだろうし、プライベートな話ならなおのことだと理解しているので、眞幸も特別気にすることは無い。

成彰が席を離れている間に、眞幸は料理を堪能する。

——魚って、自分で減多に料理しないし、お惣菜で買う時もお肉に偏りがちだからあんまり食べないけど、やっぱりおいしい……。

真鯛のポアレを食べながら、しみじみと思う。

成彰に話した通り、普通の食生活はかろうじて自炊といってもいいかもしれないというレベルだが、その内容はワンパターンになりがちで、褒められたものではない。

——お魚も週に一度くらいは、食べようかな……。

綺麗に食べ終えてフォークを置き、水を一口飲む。

そのグラスを置いてややすると、成彰がテーブルに戻ってきた。

「悪かったな」

中座した詫びを口にして座りなおしたが、成彰は眞幸の顔を見て、少し笑う。

「……なんですか？ もしかして、顔にソースか何か、ついてますか？」

笑われた理由が分からなくて問うと、成彰は頭を横に振った。

「いや、そうじゃない。席に戻ってくる時、布越しに眞幸の姿が見えて、初めて会った時のことを思い出した」

「僕が高校二年の時ですね」

眞幸が通っていた高校は、栖芳学院という中高全寮制の学校だった。

高校からの編入もごく少数——その年によって違うが、多くても二十人程度だ——受け入れられており、眞幸はそのごく少数の高校からの編入組だ。

栖芳学院は比較的裕福な家の子供が多く、企業の創業者の家の子息だの、茶道や華道の大家の子息だのそういった生徒がごろごろしていた。

眞幸もそういう意味では周囲と同じく「御曹司」という立場ではあったが、実情は彼らとは少し違っていた。

眞幸の実母は、眞幸が五歳の時に亡くなって、そのあと、すぐに父が再婚した。

後妻との折り合いはあまりよくなかった。あからさまな嫌がらせをされたことはなかったが、避けられているのは子供心にも分かった。

何より、彼女は自分の産んだ子供——眞幸にとっては異母弟だ——を溺愛していた。

眞幸は使用人たちによって育てられたといっても過言ではない。

だが、彼らが愛情を持って身の回りの世話をしてくれたおかげで、寂しい思いも特にしなかった。

『自分を産んでくれた母親がいない』というのはそういうことだ、と割り切れる程度には眞幸は物分かりがよかったし、その頃には祖父母がいたので、祖父母がちゃんと眞幸に愛情を注いでく

れていた。

栖芳学院高等部への編入を父親から持ち出された時は戸惑ったが、将来を考えればそこでコネクションを築き上げることは大事だと説明されて、それには納得できるところもあったし、何より父親にとっても、眞幸を全寮制の学校に行かせることは都合が良かったのだろう。

いや、どちらかといえば、栖芳学院への編入の話を持ってきたのは、後妻かもしれない。

彼女が自分の存在を疎んでいることは、もうこの頃にははっきりと理解していたからだ。

実際、一年生の時に、ゴールデンウィークや夏休みといった長期の休暇の際には実家に戻ったが、眞幸の帰宅に合わせてるように後妻は異母弟を連れて旅行に出て、顔を合わせる事がなかった。

それが「顔を見たくない」という意思表示だということは分かったし、それに対して言い訳めいた話をする父親の言葉も聞きたくなくて、冬休みからは家に戻らなかった。

栖芳学院には、いろいろな理由で——単純に面倒くさいとか、両親が共に海外の危険な地域に赴任しているのでおいそれと会いに行けないとか——長期休暇も寮で過ごす生徒が一割程度いたので、眞幸が家に戻らずとも、特に誰も何も聞いてはこなかった。

そして二年になったゴールデンウィーク。

眞幸はお気に入りである図書館棟の時計台の下の窓辺で本を読んでいた。

栖芳学院は山の中腹にあり、中等部の寮と校舎は麓側、図書館棟を挟んで高等部の寮と校舎は山頂側に建てられていた。

図書館棟は中等部高等部の共用だが、両方の校舎の高低差から、一階には中等部向けの資料や書物が、そして二階が映像資料などを利用するためのオーディオルームになっており、高等部向けの資料や書物は三階にあった。

その図書館棟の端に、そこから尖塔のように延びる時計台があり、途中の小さな窓のある場所が眞幸のとおき場所だった。

時計修理のために機械室に上る折れ階段が設けられているのだが、その折れ階段の途中には何箇所か有事の際の備品を収めた箱の置かれたスペースがある。

眞幸がいたのもその中の一つで、眞幸がイスがわりに座っていたのは、その備品入れだ。

わざわざ階段を上ってこなければならぬ場所なので他に人が来ることもなく、静かで、ゆっくりと本を読むには丁度いい場所だった。

この時も、図書館から借りた本を手に、眞幸はそこで読書していた。

寮の部屋は二人一部屋で、同室の生徒が帰宅しているので、部屋にいても静かだからそこで本を読んでもよかった。

だが、わざわざそこを選んだのは、本を読み終わればすぐに階段を下りて図書館で新しいものを借りてこられるし、何にも増して自分の部屋よりも、ここの空間にいる方が眞幸は落ち着いた。

多くの生徒が帰宅して、いつも以上に人気のない場所で眞幸は物語の世界に没頭する。そしてふっと読む目を止めたのは、視線を感じたからだ。

寮に残っている誰かが来たのだろうかと思線を感じた階段側を見ると、そこには見たことのない

い長身の男が立っていた。

シャツを無造作に肘辺りまで折り上げ、グレーのベストに同じ色のスーツパンツを纏った男は、眞幸が自分に視線を向けたのを確認すると、ほんの少し口元に笑みを浮かべてから、

「読書の邪魔をしたか？」

そう聞いてきた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>